

## 追記

の職場を転職

昭和十八年三月 満州国官吏専売総局採用

昭和十八年十月 チチハル専売所勤務

昭和二十年三月 入隊のため休職  
(愛知県 河村 廣康)

## 抑留体験

愛知県 鈴木 英一

私はシベリアには昭和二十(一九四五)年十一月から二十三年六月まで、二十歳から二十三歳まで抑留されておりました。東シベリアにチタという都市があります。知多半島の知多市とは姉妹都市となっています。このシベリアのチタ市から南西二百キロほどのところにハラゲンという小さな村があります。そして、十七〜八キロ、奥に入った電気も水道も井戸も何も無い山の中の収容所で伐採をさせられていました。

シベリアから帰国してもう六十余年となります。十年一昔、遠い昔のことのようにも思いますが、私には最近のように感じます。

シベリア抑留生活は思い出すのも嫌なことで、あまり他人にお話ししたことはありませんでした。ところが十年ほど前のことでした。

高校生の孫が「おじいちゃんはシベリアに行ったことがあるんだね」と言うので、「若いころ行ったことがあるよ」と答えたら、「観光でしょう、どこへ行って何を見たの」と言うんですね。これには驚きました。学校ではシベリア抑留ということを教えないのですね。このとき、これはいかんと思いました。

戦争が終わったというのに六十万人以上と言われる日本の将兵がシベリアに強制抑留されて、凍るような寒さの中で、食べるものも少なく、重労働で酷使されて六万人以上の人が異国の土と果ててしまったということが、このままでは忘れられてしまう。幸運にも生きて帰れた者の務めとして、この不法なソ連のシベリア抑留の事実を風化させではならないと考えて、同じ思いを持ったグループの人たちの仲間入りをし、微力ですが抑留展のお手伝いやお話をさせていただいて、一人でも多くの方にシベリア抑留のことを知ってもらいたいと思っておる次第です。

昭和二十年八月九日、突如、ソ連軍が満州に侵攻して来ました。当時、私は西部国境で陣地構築をしており、直ちに応戦、八月二十九日に初めて停戦を知り、武装解除を受けるまでソ軍と戦闘を続けておりました。そんな関係で、ソ満国境の満州里を通過してソ連領に入ったのが十一月三日で、かなり遅い時期でした。

ウラジオストクから日本に帰るのだというソ連側の言葉を真に受けて、家畜を運搬するような貨車に押し込められ輸送されました。当然、列車は東に向かっていているものと思っていたのですが、ある日、列車の進行方向に夕日が沈んでいくのを見て、（ウラジオストクじゃない、シベリア行だ、だまされた）と騒いだのですが、後の祭りでした。これがソ連側にだまされた最初で、後は何度だまされたか数えきれません。

ちよつとそれますが、西シベリアにイルクーツクという大きな都市があります。この南東に深さ一、六二〇メートル、透明度は四〇メートルとい

う、世界で最も大きな湖があります、バイカル湖です。ある部隊は輸送列車からこのバイカル湖を見て、「日本海だ、日本海だ」と、小躍りして喜んでという笑えない話があります。

さて、シベリア抑留は凍るような寒さ、食べるものがない上、ノルマに追われての重労働の三重苦です。そして、体に群がるシラミがあります。

零下三〇度を超す寒さは、暖かいこの東海地方では想像もできません。あの寒いと言われた北満で過ごした私も身にこたえました。外で話すのも口がこわばってはつきり言えません。まつげもまばたきしないと白くなります。ちよつと油断すると凍傷になり、手足の指などを切断するようになります。頭の先から足の下まで防寒具を着けるのですが、現在、南極越冬隊が使っているような上等なものではなく、何とか寒さをしのぐ程度のものでした。

シベリアは春と夏は非常に短くて、秋を通り越してすぐ冬になります。夏は日中はかなり暑くな

りますが、夜は急激に冷えてきます。忘れもしません。二十一年の八月三十日に初雪が降りました。このときはショックで愕然がくぜんとしました。果たして、この冬を生きて越すことができるだろうか、暗い暗い気持ちにおそわれました。

ところで、収容所での一日の食事は、朝晩が高粱や粟などの雑穀の粥が飯盒の蓋に八分ほど、身のないスープが中蓋に一杯、親指の先ぐらいの野菜の切れ端、魚や肉が入っていれば運がいいと喜んだものでした。昼食は作業場で食べる黒パン三〇〇グラムですが、これは前の晩に夕食と一緒に分配するので、夕食と一緒に食べてしまいます。いくらか腹の足しになったような気がしたものです。翌日の昼は飯盒一杯の雪を解かして、近くにあるタンポポやアカザ、ノビルなど食べられる野草やキノコを煮て、岩塩をちよつぱり入れたスープを作って飲みました。いつとき満腹となりますが栄養にはなりません。なかには毒キノコを食べて亡くなった仲間もありました。

伐採作業中、ねずみが現れると、仕事を放り出して大勢で追いかけて捕まえ、焚き火で焼いて食べたものでした。日本のドブネズミと違って大きい野ネズミで、これはうまく栄養源になりました。夕食が終わると、五、六人が集まって、つばをこくりと飲み込んでお国自慢の食べ物の話に花が咲き、最後は味噌汁とたくあんで白い飯を腹いっぱい食べたい、早く帰りたいと言ってお開きになりました。

伐採は二人一組で、二人でひく大きなのこぎりと斧一丁を持って膝まで付く雪の山の中に入っての作業でした。ほとんどが伐採するのは初めてで要領が分からず、その上、栄養失調で体がふらつき、防寒具が重たくて仕事もはかどらず、ノルマもなかなかできない状態でした。寒くて焚き火にあたっていると、ソ連の兵隊が「ヴェストラダワイ」（早くやれ）と銃口を向けて脅します。いつも夜空を仰いで山を下りて帰ったものでした。

伐採中、他のグループの倒した木の下敷きにな

って亡くなった人もおりました。無残でした。防寒帽で耳が塞がっており、体の動きも鈍く逃げ遅れてしまうのです。また、自分が切って倒した木が反動で根元が跳ねるのでよけるのですが、なかにはよけずにいる者もおるのです。木が足に当たり骨折して即入院です。そうすると、はたの者は、あいつはうまいことをしたと言うんですね。明日から当分の間、伐採をやらなくてもよくなるからです。そんなに伐採は嫌な作業でした。

栄養失調とシラミによって発疹チフスや回帰熱などで二十一年春の終わりがるまでに私たちの収容所では二割近くの人が倒れて帰らぬ人となりました。作業の行き帰りに道路で倒れて息を引き取ります。隣で寝ているのが起きないのでよく見ると冷たくなっています。食事をしながら箸をぼとりと落としてそのまま息絶えているのです。人間は楽に死ぬるもんだと思つたものです。そして、次は自分の番だと覚悟をしていました。

あまり大勢の日本兵が死ぬので身体検査をやる

ようになりました。身体検査と言っても、女医の前で洗濯板のようなあばら骨を出して素っ裸になりお尻を向けるのです。女医と言っても、体の大きい婆様です。彼女は大きい指でお尻をつまみ、元に戻ると「ハラシヨ」（よろしい）ということ、明日から伐採です。元に戻らないと「ネハラシヨ」（だめだ）ということ、収容所で休養か軽作業となります。

朝、作業に出発する前に五列縦隊に整列して人員点呼をやるのですが、私たちなら端の一行に番号をかけて十五番までだったら七十五人とすぐ計算できるのですが、ソ連の兵隊は横から縦へと一人ひとり指差して数えていくのですが、間違えたとまた最初から数え直すのです。私たちは寒さに震えて足踏みなどして体を動かしているのですが、その時間の長いこと、こんな連中に命令されてこき使われていると思うと、腹立たしく情けない気持ちになりました。

これが毎朝のことです。

以上、お話ししたのは私の抑留体験の一部ですが、これがすべての収容所の状態だと言いきれませんが、そのほとんどが同じ状況ではなかったかと思えます、

シベリア抑留と言いますと、異国の丘の歌を思い浮かべることと思いますが、私はシベリアの収容所ではこの『異国の丘』を歌ったことも聞いたこともありませんでした。帰国して、知人からラジオで放送されたとき、「歌ったかん、なつかしいずら」と言われて、これが『異国の丘』かと初めて知ったのです。

東シベリア、西シベリア、中央アジア、蒙古など広いソ連領内に二千近くの収容所があったとのこと。作業も伐採、炭坑、道路工事、鉄道敷設、建築工事、農場、工場など、あらゆる作業をやらされてソ連復興の労働力として日本人は酷使されたのです。

戦争が終わったというのに六十万人以上と言われる日本人がシベリアに強制連行されたのです、

国家的な拉致です。そして、酷寒、飢餓、重労働で六万人以上と言われる人たちが倒れて凍った土地の下で無念の思いで眠っているのです。この事実を私たちは決して忘れてはならないと思うのです。風化させてはなりません。何のために、戦争が終わったというのにシベリアに強制連行されて大勢の日本人が死ななければならなかったのか、六十余年経った今も、私の心の中では答えが出ておりません。

最後にシベリアの凍土に今も無念の思いで眠っている御霊に対して、皆さんとご冥福をお祈りしたいと思います。

## シベリア抑留生活

愛知県 今井昭治

戦争が終わって六十三年が経過しました。大日本帝国が戦に敗れて敗戦国となった悲しみと情けなさは、当時の日本人の誰しもが感じたことと思います。外地の戦場におった者の悲しみは、敵中におり、これから先がどうなることか分からないという非常に大変な心配事がありました。

日ソ中立条約を破って旧満州へ侵攻してきたソ連軍は、終戦となると私たちを武装解除した後に日本国に帰国させると嘘を言ってだましてソ連領に連れ込み、大きな船の着く港まで汽車で行き、そこから船に乗って東京ダモイだと、貨物列車に荷物同様に押し込まれましたが、日本に帰ると思う希望があるために不自由な列車生活を我慢しましたが、着いて下車したところは港ではなく、どこであるか全くわからないシベリア鉄道の支線の